

論文題目 日本とウズベキスタンを対象とした異文化間レトリック研究  
—論証文における文章と文章観の多様性—

氏名 近藤 行人

## 論文要旨

本研究の目的は、ウズベキスタンの学習者が抱える「書くこと」に関する問題の背景を明らかにするため、学習者が書く作文の文章構造や内容が社会文化的な影響を持つかどうかを検討することにある。

社会文化と文章談話のかかわりについては、対照修辞学研究及びその後継である異文化間レトリック研究において検討されてきた。しかし、研究の対象は英語とそれ以外の言語の文章談話の特徴を検討するものが中心であった。このような学問領域の広がりの中にあって、日本語学習者にとって有用な知見として日本語とそれ以外の言語の母語話者が書いた作文を検討し、その異なりを見出すこと、そしてそのような異なりを支えている要因は何かとすることを一連の過程として示した研究成果はない。このため本研究では、日本とウズベキスタンを対象とし、日本人母語話者、ウズベク人母語話者、ウズベク人日本語学習者という3つの視点からそれぞれの文章及び文章観について検討することを目的とする。

このため、第1部では、本研究が理論的背景とした、文章に対する文化的影響を検討する学問領域である、対照修辞学(CR)及び異文化間レトリック(IR)研究を歴史的に概観し、CRに対する批判やそれを乗り越える取り組みをまとめた。そして、第2言語学習者に資するという観点からCR/IR研究が明らかにしたこと、今後の方向性などについて論じた。そして、このうち、Small CultureとLarge Culture双方の影響を考慮して、プロダクトである文章を検討すること、プロダクトである文章が産出される要因を探るために、書き手や読み手が実際にどのような文章をよいと考えているかということを検討することを本研究の目的としたのである。

そこで、第2部では研究1として、プロダクトである文章の異なりを検討することにした。このため、大学や日本語学校等で最もよく書かれる文章の一つである論証文を取り上げることとし、この論証文を分析するための理論的枠組みを検討した。ここでは、論理学や議論学における先行研究を参照しながら、文章構造を検討する方法論と論証文の内容である説得性を検討する方法論についての理論的枠組みをまとめた。また、先にも述べたSmall CultureとLarge Cultureの影響を考慮するため、最大限の類似性を考慮した日本人大学生、ウズベク人大学生、ウズベク人大学生の日本語学習者という3群を設定し、3者が書いた論証文の特徴を3群比較することにした。

これを基に6章では、3群の文章構造を比較した。その結果、日本人大学生とウズベク人大学生の論証文には、大きな異なりがみられた。また、ウズベク人日本語学習者の論証文には、ウズベキスタン型の文章構造を持つ論証文と、冒頭に意見を表明す

るような文章構造の論証文が混在していたことがわかった。

7章では、3群の論証文の説得性を比較した。その結果、3群すべてが、[言論]のアピールを中心とした論証文であったが、比較すれば、日本人大学生では[感情]が重要視され、遺族への共感といった論拠が用いられること、また、宗教に基づく論拠は書かれないことがわかった。ウズベク人大学生では、[道徳]が重要視された。また、[感情]についても加害者遺族への共感といった日本人にはみられなかった論拠が書かれることがわかった。ウズベク人日本語学習者では、最も重要であるのが[言論]であり、このアピールを中心とした論証文を書く者と、最も重要であるのが[道徳]であり、このアピールの分量が多い論証文を書く者に2分されていたことがわかった。

8章ではこれらの結果から、文章産出過程から考えた外在的要因を探り、読み手の想定が異なっていたことや、教育的背景の影響といったことを考察したが、プロダクトである文章のみを対象とした分析では、これ以上の結論は導き出せない。このため、研究2においてプロダクトが異なる要因を探ることを大きな目的とした。

そこで、第3部では研究2として、そもそもよい文章と考えているものが異なるのではないかという問題に立ち返り、今回研究1で書かれた論証文を手掛かりに、どのような文章をよいと考えているかを検討することとした。このため、9章では、文章観についての先行研究から本研究における文章観の定義づけを行い、これまでに行われた文章観や作文教育における文化差を扱った先行研究を概観した。そのうえで、作文教育に携わる教師を対象として、日本人教師、ウズベク人ウズベク語教師、ウズベク人日本語教師という3者の文章観を検討することにした。また、10章ではこの文章観を検討するための研究方法として質的な研究手法を採用することとし、本研究でデータ採取に採用するPAC分析や、分析に用いられる質的分析手法について検討した。

これをもとに11章では、まず日本人教師とウズベク人教師の文章観の比較を行った。この結果、日本人大学生とウズベク人ウズベク語教師では、想定していた文章のジャンルが異なっていたことや、文章構造や説得性などお互いが「よい」、あるいは「悪い」と判断する基準が異なっていた。また、これは研究1でみられた特徴と符合するものであった。

12章では、学習者であるという背景を有しているウズベク人日本語教師の文章観に関する事例を記述した。その結果、日本型の文章をよいと考える教師、ウズベク型の文章をよいと考える教師という対照的な文章観がみられた。一方で、両者の異なりを認識しながら、文章観を形成していた教師もいた。

13章では、11章及び12章の結果を基に文章観の異なりがどこから来るのかについて考察した。これには、心情的価値観や社会的規範といった道徳的な価値観が関わっており、これらの価値観は文化的な影響を強く受けていることが一つの要因ではないかということについて論じた。また、新たな文章の学習とは、新たな価値観の学習であり、これを変容的学習という観点から捉え、質の高い知識を得ることが必要であることを論じた。

第4部では、研究1及び研究2で得られた本研究及び先行研究の知見を基に、第2言語学習者を対象とした作文教育実践への応用について論じた。まず、14章では、対照修辞学及び異文化間レトリックの知見を基に、文化と文章の異なりが実践でどのよ

うに用いられてきたかを述べた。CR や IR の知見に基づく実践としては、L1 と目標言語のテキストの異なりを分析して振り返る実践、これまでの自分自身のライティングを振り返ったうえで、現在のライティングを見つめ直す実践、読み手の反応を受けながら、読み手の求める文章を調節する実践が行われていた。15 章では、先行研究の知見と研究 1 及び研究 2 で得られた知見を用い、ウズベク人日本語学習者を対象とした「自分の文章の特徴を知り、読み手の想定にそった文章に修正することを通じて、多様な文章と文章観を知る」ことを目的とした実践報告を行った。この実践により学習者は、日本とウズベキスタンで異なる文章や異なる考え方が存在していることに気づき、また、これまでの自分自身のライティングを振り返って、自分自身の文章観がどのように形成されたのかを考えていた。そして、自分とは異なる様々な考えを持った読み手に合わせ、文章を読み手に向けて書く重要性に気が付いたと語った。これらのことから、これまでの様々な文章を書いた経験によって自分自身の文章が形成されていることを知り、そのうえで読み手に合わせた文章を書くことができるような作文教育を行うことの意義を指摘した。

以上、日本とウズベキスタンを対象として、それぞれの母語話者及び学習者という 3 つの視点から文章談話の異なりを検討した。これらの結果はプロダクトとしての文章が社会文化によって異なる事、そして、学習者は、この影響を必ずしも一方的に受け入れているわけではなく、それぞれが経験をどう受け止めているかによって、文章観及び彼らが書く文章が形成されていることを示した。このような文章観に無自覚な場合、自身の文章の意図が相手に理解されない場合に、劣っていると感じてしまう可能性も示唆される。今後、多元的な文章の様相の存在を知ったうえで、読み手に合わせた文章に調節するための方策を考えていく必要があるだろう。